FLPS

Fuzoku Lounge for Practical Studies

ふぞく研究ラウンジ no.11

発行：2022.12.20
編集：鳥取大学附属学校部

「ふぞく研究ラウンジ」は鳥取大学附属４校園が取り組んでいる教育研究の「今」をお知らせする広報紙です。地域の教育関係者の皆様とともに地域の教育について考えるための「対話」の場をつくりたい、との思いからスタートしました。

第 11 号では今年度の研究の取組を紹介しております。皆様からのご意見やご感想をお聞かせください。

附属特別支援学校

研究主題

６歳から２０歳までの『自分づくり』を支える教育課程の創造

３年計画　最終年度

本校は「生活を楽しむ子」を育む教育理念のもと、一人一人の主体的な自我・自己の発揮を支える「自分づくり」の考えを基盤にして、児童生徒学生の内面とライフステージを大切にした教育内容を追求し、一貫性のある教育課程を編成することを目的として研究活動を行っています。

専攻科までゆっくり20歳まで豊かに学んでいくための教育課程の充実のため、表１で示したような計画で研究活動を進めています。

表１：研究計画

１年次	学部の教育内容の見直し └→各々の学部をたがやす
２年次	学部内の検討＋縦割りの部会で系統性検討 └→学部と学部をつなぐる
３年次	新教育課程の実践を進めて検証と改善 └→実践と改善

研究３年次にあたる本年度は、２年次に検討した各学部の教育課程、教育内容を実践しながら改善していく年です。

各学部では、児童生徒学生の「自分づくり」を大切にした実践を進めながら教育内容の検討を行っています。

系統性を検討するための会（教育課程を考える会）では、昨年度作成した学習内容一覧表をもとに、系統性を検討しています。本年度は、「暮らす・楽しむ」の視点で小学部が生活単元学習を、「働く」の視点で中学部が作業学習を、「学ぶ」の視点で高等部専攻科が研究授業を行い、事後研究会では、学部間のつながりや系統性についての意見交換も行いました。

図１：研究体制

２つの会をまとめ上げる役割として教育課程検討委員会を置き、全体の集約と調整を図ります。

研究活動の充実を目的として鳥取大学教授、川井田祥子本校校長による「就労」についての研修を行ったり、新版Ｋ式発達検査の検査法について学部ごとに研修を行ったりしました。

研究授業の様子

●小学部 生活単元学習
「ふれあいまつりをしよう」
まつりの「ゲームのお店」の準備や練習をしました。

事後研究会では「自分の役割」「楽しむ姿」「主体性」などについて学部を超えて意見交換するとともに、指導助言者の山根俊喜先生より「ごっこ遊びも子どもにとっては本気の遊び。本物に近い教材を。」等、ご助言を頂きました。

●中学部 作業学習
「誰かのための逸品を作ろう」
製品作りの企画をしました。

事後研究会では「仲間とともに」「学習環境づくりについて」などについて、それぞれの学部の実践を話し合ったり、指導助言者の寺川志奈子先生より「実際の経験をくぐって「働く」ことの概念がつくられていくプロセス」について等、ご指導を頂きました。

附属小学校

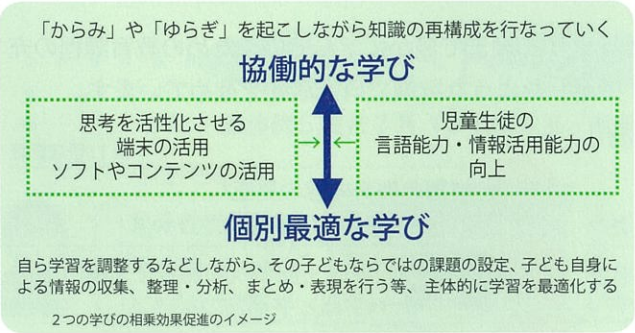
個別最適な学びが、未来の知への探究心を高める

GIGA スクール構想の実現に向けて全国の小学校で取組みが開始されて２年目を迎えました。小学校での授業のスタイルも１人１台のタブレット端末によって大きく変わりつつあります。新型コロナウイルス感染症の流行が続く中、学校での子供たちの学びの姿も大きく変化しています。

本校においては昨年度から学びの『しやすさ』をキーワードに GIGA スクール構想の実現に向け取組みを続けてきました。すでに学校内では、授業の中でタブレット端末は当たり前の学習ツールの１つとして子供たちに認識されています。そこで今年度は、昨年度からの流れをさらに発展させた形で、研究を新たなフェーズに進めています。教科・領域特有の見方・考え方を働かせる学びの中に、子供たち1人1人がタブレット端末などによって個別最適な学びを実現させていく授業を実践していきます。

今年度は個別最適な学びをキーワードにして、子供たちの知への探究心を高めていこうと考えています。子供たちは授業の中で１人１人に合った学び方で探究することに没頭し、たどり着いた『知』（知識）を１人１人多様な方法で表現することで学びを楽しんでいきます。それにより将来にわたって知への探究心を高めていくことができると考えます。

本校は地域のモデル校として、すべての学校で実施できる授業を提案し、広く発信し続けています。本年度の研究では，多くの学校で実践できる各教科・領域における個別最適な学びを実現する授業の姿を明らかにしていくことをめざしています。



２つの学びの相乗効果促進のイメージ

参考：学校と ICT 学習指導要領 / 教育の情報化 GIGA スクール環境の活用
１人１台端末の軽やかな日常使いのポイント
（2021 年９月掲載） 中川 一史（放送大学教授）より

≪研究として追究していくもの≫

★授業において「個別最適な学び」と一体的に取り組んでいく『協働的な学び』の姿を効果的に引き出すために、どのような手立てが必要になるのかを探っていく。

★「個別最適な学び」の実現に必要とされる「指導の個別化」と「学習の個性化」をどのように授業に位置付けると、主体的に学習を調整する学びの姿が現れるのかを明らかにしていく。

本年度の研究では、大きく２つの柱で研究主題に迫っていきます。１つ目が「個別最適な学び」と一体的に取り組んでいく「協働的な学び」の姿です。単に学習活動をグループで行っていくだけではなく、個別での学びをより深めるために互いの学びを刺激し合う協働的な学びを行う必要があります。そのためには協働する意図を明確にし、コミュニケーションを豊かに行うための場づくりをし、子供たち自身が協働する友達の学ぶ姿を学びの対象として意識する必要があると考えます。そのためには授業づくりにおいて教師の仕掛けが不可欠です。どのような仕掛けが有効であるのかを研究の中で追究していきます。２つ目の柱が、「個別最適な学び」の実現に必要とされる「指導の個別化」と「学習の個性化」です。特に「学習の個性化」については、本校ではその捉えに教職員の間でも共通の具体的イメージが十分にもてていません。この「学習の個性化」をどのように授業に位置付けていくことが有効かを明らかにしていくことを研究の中で追究していきます。

6年≪理科≫
酸素、50%、二酸化炭素、50%の人工空気中でものが燃える理由について、これまで学習して得た知識（考察やまとめ）や実験のデータを使っての課題解決

4年≪音楽科≫
グループでのお囃子づくりに挑戦して、自分の音と友達の音を重ねながら自分たちのお囃子を意欲的に創作

研究の今後

実践授業を繰り返す中で教職員の「個別最適な学び」についての理解が深まり、タブレット端末を活用した「学習の個性化」の取組みも進んでいます。今後はさらに、子供たち自らが ICT を有効に活用しながら学習状況を把握し、主体的に学習を調整する学びの姿に変容していけることをめざして研究に取り組んでいきます。これは、昨年度追究してきた ICT 活用段階を段階２『拡

張』から段階3『変容』へと進める学びの姿にもつながっていくと考えます。未来の知への探究心を高めるためには、子供たちだけでなく教職員自身が学びへの意識を変容させ、明確なイメージをもって取り組んでいく必要があります。

3年≪国語科≫
物語全体を通したあらすじを作る学習で、自分の考えをもち、全体共有を通して再度自分の考えを精査・推敲したり、資料や作品を作成したりする活動

2年≪生活科≫
収穫した野菜でやりたいことについて考えたり調べたりする中で、実物や本、タブレット、その道のプロ等さまざまなツールを学習材として、各自が必要だと考えたものを活用

4年≪外国語活動≫
子供たちのコミュニケーション活動がより円滑に行われるように個人の学びの時間（ステップアップタイム）を設定

附属中学校

研究主題
学ぶ力を育む「やりくり」授業の開発
4年次

附属中学校では「やりくり」という言葉をキーワードにして、授業開発を行っています。「やりくり」授業とは、生徒に対して自立的、創造的、探求的な学びを促すことを目的とした活動であり、令和元年度からは「既有の知識や技能、生活経験を駆使した、問題を解決するための思考を伴った行為」と定義しなおして研究を進めてきました。

平成28年中教審答申では、これから子どもたちが生きる社会について「社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となってきており、しかもそうした変化が、どのような職業や人生を選択するかにかかわらず、全ての子供たちの生き方に影響するものとなっている。社会の変化にいかに対処していくかという受け身の観点に立つのであれば、難しい時代になると考えられるかもしれない。」と述べられており、ますます「やりくり」を通した生徒の思考力の育成が必要となっていると感じます。

そして、本年度は3年ぶりに対面での研究発表大会を開催し、多くの方々にご来校いただきました。さらに各教科の授業や東京大学大学院の藤村宣之先生によるご講演の動画配信を行い、当日の発表と合わせて多くの方に本校の研究に触れていただくことができました。

本稿では研究発表大会の様子をご紹介します。

1年 美術 ▪ 博物館の協力により、鑑賞ツール「Walk View」を使用した活動。作品に「入る」ことで鑑賞を深めます。

2年 英語 ▪ 鳥取の魅力を伝える活動。伝える相手を具体的にイメージして文の構成を考えました。

3年 社会科 ▪ 歴史的分野と公民的分野との接続を意識した学習課題。これからの日本の発電エネルギーについて考えました。

研究発表大会

令和4年7月2日（土）に開催した研究発表大会では、14の授業公開と数学のワークショップを行いました。大会当日までに東京大学大学院の藤村宣之先生にオンラインでご参加いただいて各教科の方向性や各公開授業の内容について指導助言をいただきました。

指導をいただく中で、「やりくり」の課題設定のポイントや学級で学びを共有する方法等多くのことを確認することができました。

東京大学大学院の藤村宣之先生には『やりくり授業と協同的探究学習を通じた学びの深まり』～「個別最適な学び」の保障を通して～と題して講演をいただきました。この講演で、本校の実践している「やりくり」授業が、現行の学習指導要領で盛んに叫ばれている「協働的な学び」と「個別最適な学び」との一体化を保障しうる取り組みであることを再確認することができました。

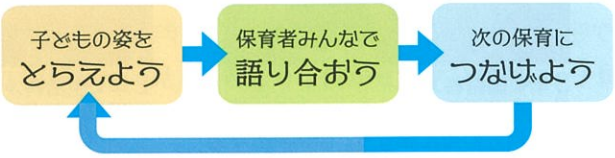
本年度の公開授業や講演会の動画の限定公開は現在終了しておりますが、関心を持たれた方は本校副校長までご連絡ください。なお本年度末には研究紀要も発行予定です。合わせてご覧ください。

附属幼稚園

令和４年度　研究テーマ

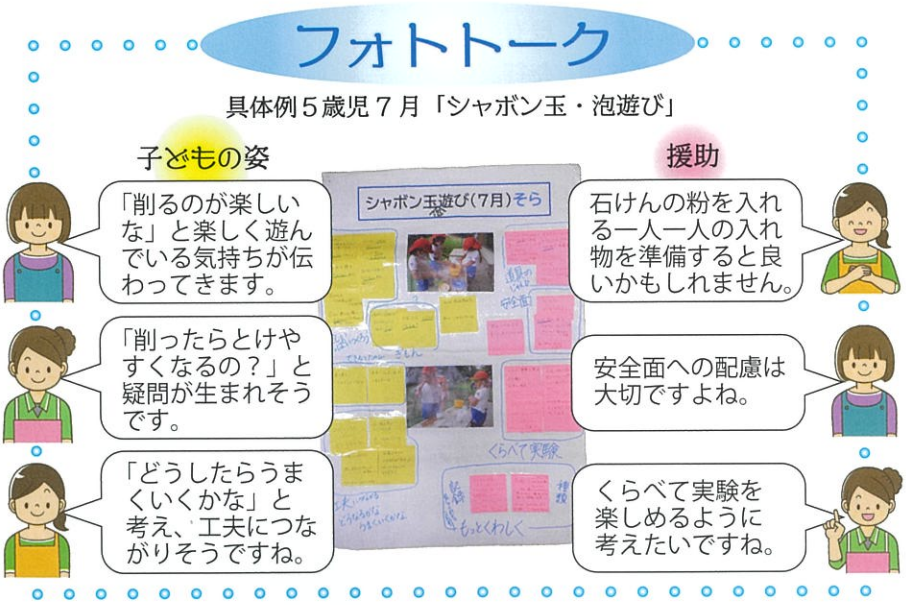
子どもが夢中になって遊ぶ 保育者の援助の在り方

～職員研修を通して学び合う～



本園では、子どもが自ら遊びを見つけ、試行錯誤し、遊びを深めていく中で、様々な経験をすることを大切にして、「遊びは学び」をキーワードに保育実践と研究に取り組んでいます。本年度は、子どもたちが遊びに没頭し夢中になって遊ぶ姿を目指して、職員研修で話し合いを重ねて保育者が互いに学び合うことによって遊びの中で子どもたち自身が充実感や満足感を味わうことにつなげたいと考えました。そこで、「子どもの姿をとらえよう」「保育者みんなで語り合おう」「次の保育につなげよう」の３つのステップで研究を進めています。「とらえよう」では主に記録をとること、「語り合おう」では記録を基に職員研修で意見を出し合うこと、「つなげよう」では語り合って学んだことや改善点などを指導計画に反映することについて取り組んでいます。

ここでは、「語り合おう」の研究で行っている「フォトトーク」の様子について紹介します。「フォトトーク」とは、子どもの写真を見て、保育者が読み取った子どもの思いや保育者の願い、それぞれが考える保育者の援助について語り合うものです。特に大切にしているのが、「保育者みんなで」行うことです。常勤職員だけでなく非常勤職員も可能な限り参加するようにしています。子どもたちが遊んでいる写真について担任が簡単に説明した後、「子どもの見取り、子どもの思いや願い」を黄色い付箋に、「遊びが充実するための援助」をピンクの付箋に書き出します。そして、その付箋を分類し、見えてきた子どもの姿や保育者の援助について語り合います。その後、グループごとの発表を行い、共有します。語り合うことで援助しようとする保育者の視野が広がり、次の日からの保育に生かそうとする意識が高まるという成果が見られました。また、「夢中になって遊ぶ子どもの姿」を共通の目指す姿としてもつことができました。子どもたちも、今まで以上に様々な遊びに興味をもち、友だちと関わりながら工夫して遊ぶ姿が見られていると感じています。



これからも、フォトトーク等の継続・改善を行ってよりよい職員研修について模索し、保育者自身の学びの場をつくっていきます。常に保育を振り返り、子どもたちが豊かな経験を積み重ねる保育を実践し、夢中になって遊ぶ子どもの姿を育てていきたいと考えています。

池畔好日

●本号では附属学校における今年度の研究の取り組みを紹介しました。●特別支援学校では、専攻科まで含めた６歳から20歳までの自分づくりを支援する系統的カリキュラムの創造に取り組んでいます。小学校ではICTを活用した個別最適な学びの深化と協働的な学びとの往還について、中学校では生徒に主体的・協働的に取り組ませる「やりくり」授業について研究しています。●幼稚園では園児が夢中になって遊ぶための、保育者の在り方を「記録・討論・改善のサイクル」で取り組んでいます。●研究とは、答えがどこにあるかわからない課題に立ち向かうことです。つまり先生方がまさに「やりくり」を続ける営みと言えます。対話の中から思わぬヒントが得られることがありますので、読後の感想などをアンケートでお知らせいただけますと幸いです。